

社会ニーズに答え続ける薬学教育

医療や社会の変化に対応できる薬剤師養成に期待

現代の薬剤師には調剤や服薬指導だけでなく、多職種の連携や在宅医療、セルフケア・セルフメディケーションの支援など、幅広い役割が求められています。社会のニーズに対応し、患者さんや生活者に信頼される薬剤師と薬学教育のあり方について、日本薬剤師会理事の松浦正佳さんに聞きました。



公益社団法人日本薬剤師会
理事

松浦 正佳さん

まつうら・まさよし●1972年生まれ。97年近畿大学薬学部卒業。同年4月日本赤十字社和歌山県赤十字血液センター入社。98年4月サエラ薬局入社。2018年一般社団法人大阪府薬剤師会理事、19年一般社団法人茨木市薬剤師会副会長。20年公益社団法人日本薬剤師会理事(薬学教育委員会担当理事)、22年一般社団法人大阪府薬剤師会常務理事。20年から文部科学省薬学実務実習に関する連絡会議構成員。

「聞く力」を備えた選ばれる薬剤師に

日本の少子高齢化の流れは今後も続く見込みです。薬局の現場でも高齢世帯が増え、医療や医薬品へのニーズが高まり続けていくことを実感しています。先般の新型コロナウイルスの感染拡大時には、治療薬の供給体制に注目が集まりました。地域の薬剤師は医薬品の備蓄・調整に力を注ぎ、昼夜を問わず供給を続け、自宅療養やホテルでの宿泊療養にも可能な限り対応してきました。

新型コロナウイルスは在宅医療の推進に関心が高まるきっかけにもなり、薬剤師も地域医療を支える一員として、医療機関や行政機関などの職種を超えた連携の輪に加わる機会が増えています。一方、オンライン服薬指導の環境整備が進むなど、薬剤師を取り巻く環境は大きく変化しています。近年はスイッチOTC(市販薬に転用された医療用医薬品)も普及するなど、患者自身によるセルフケア・セルフメディケーションが浸透しています。

こうした中で薬剤師に問われる資質は、「聞く力」であると考えています。相手の話をしっかり聞いたうえで最適な調剤、服薬指導を行える。また、相手が言葉にされない潜在的な思いをうまく引き出し、お応えする。「あの人に相談したい」と患者さんから選ばれる薬剤師になるためには、こうした「聞く力」「聞き出す力」が大切であると考えています。

患者さんを元気づけられる薬学人に

薬学教育においては2006年度から6年制教育が実施され、現在では薬剤師全体の3分の1近い約十万人が現場で活躍しています。彼らは以前に比べて病気や病態といった臨床についてより深く学んでいると感じます。また近年では、カリキュラムに多職種連携を導入する学校が増え、若く優秀な薬剤師が数多く輩出されているのは心強いところです。

指針となる薬学教育モデル・コア・カリキュラムは、22年度(令和4年度)改訂版が公表されました。基本方針においては「臨床薬学という教育体制の構築」とともに、「大きく変貌(へんまう)する社会で活躍できる薬剤師を想定した教育内容」が新たに掲げられています。卒業時にもっているべき能力ではなく、卒業後もたゆまぬ研鑽(けんざん)を続け、生涯にわたって目指すべき薬剤師像を目標に設定しているところがポイントです。

また、薬剤師に求められる基本的な資質・能力として、オンラインやデジタルへの対応力を含む「情報・科学技術を活かす能力」に加え、「総合的に患者、生活者を見る姿勢」も新たに含まれた点に注目しています。例えば1日1回しか食事が摂れない患者さんに、1日3回飲む薬が処方された時はどのようにするか。粉薬が苦手な患者さんに、どのように負担を少なくしながら服薬していただくか、といった個別状況に対応できる力が求められています。

身近な体の変化について考え、さまざまな体のメカニズムや薬の作用を知ることができることが、私が考える薬学の面白さです。こうして得た知識や技能は薬局や病院だけでなく、製薬企業や研究・教育機関、行政など幅広い分野で求められています。ぜひ薬学の世界を学び、患者さんや生活者に寄り添い、薬と言葉で相手を元気づけられる人材を目指していただきたいと思います。

